

梅雨間近

首藤 静夫

紫陽花が日ごとに咲きそろう、まもなく雨の季節が到来する。最後の晴間を利用して近くの多摩川に釣りに出かけた。釣果の期待が半分、残りは俳句の材料探しである。

最近の河川は改修が進み、川の曲がりくねりにできる湾処（わんど）という小池がなくなつた。川の流れがストレートにかつ早くなり、モロコヤヤマベなどの小魚を釣る場所が少なくなつた。うちのまわりでは一箇所のみ、用水路が多摩川に交わる箇所だけである。場所取りが大変だが、幸い平日で誰もいなかった。

釣糸を垂らしてやれやれと思つた途端にギョツとした。大きな鯉が浮子に近づいてくる。これに針をひと飲みされたら一巻の終わりだ、下手をすると竿を折られる。以前、鯰がかかつて一悶着した記憶が甦つた。あわてて竿を上げ、事なきをえたが周りを見ると、いるわいるわ大きな鯉が十匹以上――。

忘れていた、鯉の産卵の時期にぶち当たつたのだ。竿を上げたまましばらく水面の様子を見ていた。水の中ほどは静かだが、周辺部の水草が茂っているあたりが騒々しい。そんな所を選んで産卵するメス、それを追つて複数のオスが相争い、のたくっている。時々水面を尾でたたく大きな音とともに飛沫を跳ね上げる。放精しているのだ。北海道などの鮭の産卵と放精の瞬間をテレビでみるが、あんな感じである。

おそろおそろ竿をまた出してみたが、どこから鯉が現れるかと思つと気が気でない。結局釣りはあきらめて俳句の材料探しにかかった。明るい空にセッカが低空を舞っている。河原に多い小鳥でヒッヒッヒと上昇する。釣りを馬鹿にされているようで癪だ。少し遠くでミュビシギだろうか、ミュイミュイと綺麗な鳴き声が聞こえる。いずれも五月の河原にふさわしい光景である。まもなく辺りの草木が鬱蒼となつて雨が降り注ぎ季節が変わるのだろう。俳句の材料集めはできなかつたが、近々の句会用には準備ができています。次の月は雨が降り出してからゆっくり考えることにしよう。